

2013年度 JAMS 関西地区の活動について

多和田裕司

2013年度の JAMS 関西地区の活動として、2014年2月22日(土)、大阪市立大学において関西地区研究会を開催した。今回は、大阪大学大学院人間科学研究科の特任助教で長年にわたってインドネシア・西ティモールにおいて研究を続けておられる森田良成さんにご発表頂いた。あわせて本学会会員で同地での調査経験もお持ちの上田達さんにコメンテーターとして加わってもらった。

森田さんは文化人類学がご専門で、学部、大学院を通して貧困をテーマに研究が続けられている。「貧しさ」とは何かとは簡単に答えられるようで、いざ答えようとすると考えこんでしまう問いである。単純に経済の平均値や標準値ではかれないことは容易に想像されるだろうが、かといって「心の豊かさ」で貧困問題を覆い隠してしまうような議論もナンセンスであろう。森田さんは、大阪の路上生活者の貧困についてフィールドワークをもとに修士論文をまとめられた後、博士課程進学後は西ティモールの都市移住者に焦点を移し、社会と経済が切り結ぶところにあらわれる貧困の様相について精力的に調査をされ、博士学位を取得された。

最近では、フィールドワークや異文化理解における映像の役割についても関心を寄せられ、人びとの暮らしを映像作品として表現することを試みられている。本発表で披露されたドキュメンタリー(『アナ・ボトルー西ティモールの町と村で生きる』)は、経済指標的には「最貧」とされる西ティモールの出稼ぎ労働者たちの日常を描き出したものである。作品の内容についてはインターネット上に森田さんご本人による紹介がアップされているし、また当日の発表の意図や質疑の要点についてもご自身がまとめてくださったので、ここでは筆者の若干の感想を記して研究会の報告としたい。

映画を拝見してまず感じたのは、ともしれば見逃しがちな些細な人びとの行為が社会科学的な大問題と直につながっていることを見だし、それを見事に映像化した手腕の素晴らしさである。映像に出てくる「アナ・ボトル」とは空き瓶回収を生業にする人びとのことであるが、彼らの多くは村からの出稼ぎ者である。映像では彼らの町での仕事ぶりや村での暮らしが丹念に紹介されているが、そこに垣間見えるのは、社会と経済をめぐる二つの関係のありかたとしての市場経済と贈与経済という相違、資本主義の論理と文化の論理との共犯的であり相克的でもある関係、国家の中の地域的民族的格差等々の問題が、抽象的な議論としてではなく、個人個人の中に生きられるものであるという事実である。市場経済的には資本主義ネットワークの最底辺に位置する人びとが同時に贈与経済という観点から見るとまったく異なる姿であらわれる様子は、現実存在する経済的、社会的貧困解決に向けて我々がいかにより多くの事柄に敏感であらねばならないかを示すものであるし、そもそも「貧しさ」にたいして安易な答えを出すことをためらわせるものとなっている。

本発表を聞いて感じたいまひとつは、ツールとしての映像の力である。一昔前のフィールドワークでは「shoot(撮影する)は shoot(撃つ)でもある」との警句がもちいられ、(当時は)カメラでの撮影が、彼我の差を「見るもの／見られるもの」という力の差に固定化し、同時に切り取られた断片を現実そのものであるかのように転換してしまう装置として敬遠されることがもっぱらであった。しかし今日では(ビデオカメラや再生装置などの)映像ツール自体がごくありふれたものとなり、彼我のどちらにとっても、そしてときには双方同時に利用可能になったことで、映像ツールには双方向的な理解へとつながる力が与え

られた。現に発表者も、自ら作成した映像を現地の人びととともに鑑賞し、その様子をさらに映像化する作業を通して、自らの異文化理解を何重もの入れ子のなかで紡ぎ出している。映像のなかに映った自分たちの様子を見て発表者とともに笑い合う人びとの姿や、発表者が撮りたいまは亡き友人の写真を見て自らもそのように記憶にとどめられることを願う村人の心情は、映像ツールが持つ可能性を示すものであろう。

映像をもとにした今回のご発表は、西ティモールというマレー世界の「辺境」を生き生きと紹介するものであると同時に、(ギアーツ風に述べれば)そのような些細な事例からそれを越えた深い議論を導き出すものともなっており、発表者とおなじく文化人類学から地域研究を志す筆者にとっては非常に興味深いお話であった。

2014 年度からは、関西地区担当運営委員として上田達さんと黄蘊さんにも加わっていただくことになった。引き続き委員の方で研究会を企画する予定であるが、会員の皆様方でもなにかご発表のご希望があれば遠慮なくお声かけ願いたい。

(参考 Website)

「【自作を語る】 カメラと記憶——『アナ・ボトル』を現地で上映して」『neoneo web』

<http://webneo.org/archives/10893>

《2013 年度関西地区研究会発表要旨》

「贈与と売買——インドネシア・西ティモールのドキュメンタリー映像を通じて」

森田良成(大阪大学大学院人間科学研究科・特任助教)

報告者は、文化人類学のフィールドワークに基づいて、2012 年に映像作品『アナ・ボトル——西ティモールの町と村に生きる』を制作した。報告では、作品を上映したうえで、この制作の過程と、その後現地で登場人物たち自身に映像を見てもらった

上映会のような紹介し、西ティモールの経済のありようとともに、人類学の研究において映像を用いることの意味を考察した。

『アナ・ボトル』では、西ティモールの村から町に出稼ぎし、稼いだ現金を気前よく村の祭礼に使ってしまう人びとの姿を描いている。開発援助の文脈では「最貧」としか表現されない彼らの村での生活は、当事者にとっては、「お金だけはない」が、「ほかのものはすべてある」ものであり、そこには祖先や親族との強いつながりがある。彼らは、市場経済と贈与経済のあいだを往復しながら、社会と経済の関係をわれわれとは異なるかたちで築き、生活を成りたせている。報告では、人類学的研究の成果であるこうした議論をアカデミズムのそとにも広く発信する手段として映像が有効であることを示した。

参加者との議論では、「メモを取ることと、カメラで撮影することとで、フィールドワークがどのように変化しうることか」、「映像作品にすることで、文章で展開していた議論をどのように単純化させたのか、あるいは深化させることができたのか」といったことが論じられた。また、現地での上映会のような解釈するうえで、彼らからこちらが期待していたような反応を見出しにくくても、明確な答えを性急に求める必要はなく、「文化」による安易な説明に陥ってはならないということが指摘された。合わせて、人類学者による映像作品の価値を説明するために、文化人類学者のフィールドワークの経験の独自性を誇りつつも、しかしそれを特権的なものと自明視してはならないことが議論された。

そもそも文化人類学の研究の特徴は、具体的な経験と抽象的な議論とのあいだを絶えず行き来することにある。映像を触媒にして起こる新しい現実には、安易な枠組みをあてはめるのではなく、その複雑さに真摯に向き合ってフィールドワークを続けていくことが重要であると、改めて確認された。